白井夫人を偲びて

杜の都といわれる仙台の名にしおう青葉山が、そのうっそうたる姿を傾けうつしている広瀬川を挟んでの台地に、古い高等学校の校舎が低く重々しい落ちついた座を占めているのです。学校の正門から川の峡谷への斜面をタラタラと下りると、川辺の細長い地域は住宅地になっていて、細く入りこんだ露地の網の糸のつながるままに家が立て込んでいるのでした。

ある秋の午後でしたが、白井先生のお宅を捜し求めて、ここらしいと思われる簡単な門の前に立って中をのぞきこんで見るとー正面には玄関でもーとの予想に反し、物干し場のようなガランとした空き地に、桐の木が二、三本明るい陽差しに立っているばかりです。念の為、一足門をくぐって見ると、奥のほうに家ー長屋のようなものが二、三軒分散しています。向かって左側の家の戸をオズオズと開けると、狭い土間です。「ハイ」と静かな、お声がしてから、暫くは何かお子様のお世話にかかっておられたようで、やがて障子が開かれました。

奥様のお召し物は青年の無頓着な眼にも、どうもお粗末に見受けられました。それに木綿物らしい質素な帯を、細くきちんとひきしめて小さく結んでおられたようです。先生のお宅というものに、初めてお伺いする生徒の漠然としたある華やかな幻想は頽れて、そのときの帯の模様の赤さだけが、やっと私の心のドギマギをとりなしてくれました。けれど、なにか書籍の拝借の用件をボソボソと申し述べますと奥様は言葉すくなに、しかし鄭重な温かいお返事を賜りました。生徒は来たときとはまた別の新しい、ひきしまった気持ちであの数軒共同の門をくぐり出たのです。

それから先生のご厚意で、毎週一回、真宗聖典のご講話会をお宅で開いてくださることになりました。仏教青年会に相当する道交会の舎生を主として、それに私のような通学生もお仲間入りをさせて戴きました。なんでも冬の夜、広瀬川ぞいの道を青葉山の陰の暗さに、わき目もふらず足をはやめてお宅に集まったことを憶えています。先生のご講話は『正信偈』についてでした。二時間ばかりで綿密なお話がおわり、お座敷に輪になって座っている私達がホッと頭を上げて息づいていますと、お台所の方から奥様がお茶器を運んで下さいました。大きな

お盆に田舎饅頭を無造作に山盛りしたものをそろえて。このお饅頭は温かそうに湯気が立っていたように思います。でなくそも私達はそれを、蒸したばかりの物のように順繰りに手に受けて温かく戴いたのでした。

この会は、かなり長く続けて下さったように思います。そして何時の間にか私達の耳が、ご講話の終わりになると、上がり口の間を隔てたむこうのお台所でカタカタとお茶のご用意らしい音を期待するようになったのも無理はないでしょう。奥様のお手でお出し下さるお茶受けは、いつもお煎餅かお饅頭だったようです。それもどこかにお手製もののような和やかな親しさのこもったものでした。ご講話の途中で、お小さい方のむずがっておられるのが洩れてくることもありましたが、そのほかには先生のお静かなお声のみが力強く室のなかに充ち、それが一種の明るい光をさえ放っているようでした。凍てついた地の底を伝わって広瀬川の瀬の音が通うてくるような静寂に浸りつ、私達はそのお声の光の下に青年らしいそれぞれの疑問や、悩みや、悶えの影をいずくまらせていたのでした。

ある時はその座のはじめから妙に固くなっている心を見出すこともありました。ある時は変にのびのびとのさばっている心でもありました。ご講話の後、座談会になりますと、そんな時々の明暗とりどりの心の相が種々な談論の形となってオズオズと這い出してきたり、突如として飛び出して来たりするのでした。

奥様はご講話の間は、お小さい方のお世話でしょうか、座には列せられませんでしたが、狭いお家のことですから、お居間のほうでお話を充分に伺っておられたご様子でした。座談の時には先生の横で黙ってお茶のお世話をしていて下さいました。時に誰か話をしているかををジッとあの円らなお目をピンと張って見つめるように眺めておられました。皆が笑うようなときには奥様もあらたまって遠慮がちな微笑をたたえられました。こんあｎ時には奥様のお顔ははじめて冴えて温かく輝くように見えました。それは座の気配を直接に受け味わうというふうではなく、どこまでも先生の陰から先生のお心を通しての感興を、あるいは感激をうけとっておられるというご態度でした。それは、このこまやかながらも、現実の中にあってなお一つの確かな理想を仰いでいる団欒を恵み、かつご自身もそれに加わり居給うというお心安らかさから生まれるつつましやかな親しいご共鳴以上には出ませんでした。

その頃、仙台求道会では。毎年一度か二度、近角先生のご法話会が開かれ、毎回三日間毎夜連続のご講話でした。当時は二高の阿刀田先生、登張先生、白井先生等が会のお世話をなさっておられた様です。がこの会に、白井先生の奥様のお姿は見えなかったように思っておりますがどうでしおうか。多分お家でお子様方のお世話でお暇がなかったからではないでしょうか。そしてこういうふうにお家におこもりになるということは、京城へお移りになってからも最後まで奥様の立場となったようです。それは真にやむをえざる道なのでしょう。いかに恵まれ、すぐれた境地の人にも矢張りどうともすることの出来ないものがあるのではないでしょうか。つきつめれば日常の一挙一投足も自分の意のままではないのでしょうけれども。

これは後の話ですが、京城から平壌の私の方へぜひ一度ご来遊を無理にもとお願い申し上げておりましたのも、私にしてみれば考えぬいた挙句の、なんとかお心のからも、ひいてはお体の方にも打開の充ちもがまとのお願いなのでしたし、それをまた必ず平壌へ赴こうとおっしゃっておりながら、来年こそは来年こそはで、とうとうその実現の機をみず、今度の悲しいお別れになってしまい〈功利的方便に堕しており、かつは我、人に対して真剣さのないことを痛感せしめられ、一人で頭を垂れて唇を噛むのです。

ここで奥様の「立場」と申しましたが、これではなんだか「先生」の立場に当てつけるような響きがあるようですが― しかし勿論先生には私どもの考えおよぶよりずっと広く深いご配慮があり、私どもの思いあがった浅はかな妄断を容れるべき筋合のものでもないことで、ただ私の側に関する限りの愚痴を申し延べた次第です。

さて、このようにご家族でお世話を戴いている間に私達の卒業期になり、私がいよいよ京都へ出ようという前日、お暇ごいにあがりました。いつものお座敷で、将来の道について先生のご懇篤なお話を承っておりますうちに、もう失礼せねばならむと思いながら、未練がましくお暇をしかねてぐずぐずしておりました。青葉山陰のこのあたりには黄昏時の靄が早春の冷えをもたらして来る時分、結局お心尽くしの晩餐を戴くことになりました。当時の貧生にとってなかなか賑やかなご馳走でしたが、戴きながら一つの失敗をしてしまいました。西洋皿の大

きなのに玉子の半熟を二つならべた、俗に「お眼玉」とか申します。あれをどうして裁くべきか途方にくれました。ままよ、スープ皿を抱え上げた西郷南州翁の先例もあｒｙことなりと、皿を両手に捧げ直接口をつけたものです。どうやらお眼玉二つが喉を通過する触感に安堵して皿を机上に返してみると、何分広い皿のことですから口の両側から軟い白味のほうがいつの間にか膝の上にこぼれてしまっているのです。木綿ながら、私の京都入学を祝って姉の仕立ててくれた、新調の袴も台なしです。

半熟の玉子にはこれ以来懲り懲りです。ところがこれから焼く十年後、私が内地から平壌へ赴任させて戴くことになり、途中京城のお宅へ伺ったとき、最初のお膳の上で巡り合ったのがまたこの「お眼玉」です。いささかまいった気持ちで十年前の失敗を申し上げたところ、奥様は「そんなことでしたか」とお笑いになりました。京城での奥様はなかなかご料理にお心を尽くしておられたようです。何分にも先生はあんなに外部とのご交際の少ない、宴会などもあまりご出席なさらぬような静かなお方だけに、せめてもとのご配慮かとも承りました。とくに西洋料理らしいものがお上手のようで、その後私がお伺いする度に種々とおいしく戴き過ぎるのでした。しかし一昨年あたりからは恐らくはお体のご疲労が募って来たのでしょう、お膳も何かしらご大儀のご様子に伺われました。

私が京都に学んでいた頃、先生は仙台から京城大学にご転任になり、次にドイツにご出張のご報知を受けましたので、神戸埠頭へお見送りに参りました。今も私の眼にまざまざと現れるのは舷側にお立ちになって、静かにお称名し在わす先生のお姿です。船と桟橋との間は万歳の嵐と五色のテープの渦巻き。愛別離苦と歓喜感激とが組んづ、ほぐれつ湧きかえり狂いあがっている最中に。

このときにも奥様がお出になっておらぬことを、私はありきたりの常識と比べて意識していたのでした。そしてそこに何かしら強く教えられるものがあることを感じて、私は汽車を待つ間、海岸沿いの工場街の人気少ない通りを歩きまわっていたのでした。

昭和八年四月、私は平壌への赴任の途、京城駅頭、先生のお迎えを忝く致しました。

この朝鮮へのご縁については、当時は一向に存じませんでしたが、とくに奥様のご高配を申し述べねばならな

いのですが、いささか私事にわたることゆえ遠慮させて戴きまして、ただあの「お眼玉」のことだけに止めます。

京城のお宅は仙台の谷地とは全く正反対で南山と向かい合った高い丘陵の頂上、少し南斜面という極めて高夾な場所です。南山との間に広い谷を挟んで霧がこの下街を覆う夜など、二階は直ちに一面の海に臨むような趣がありました。

もうお子様は五人で、お兄様が中学入試勉強中、お小さいのはやっとご誕生なったばかりです。オモニは居ることもあり、居らぬこともあり、恐らくはその後を通じて奥様お一人でお働きになっている期間の方が多かったでしょう。

それから現在まで数年間の追憶と申しましょうか、どうも思う出があまり生々しくて、種々なことが皆、昨日の一今朝のうちのような気がしてなりません。さて何から書き出したものでしょうか、書くと申すより、まだ今も奥様のお前に座って親しくお話を伺っているような気持ちなのでしょうから。

ご病気でお亡くなりになった今にして見ると、何もかもこの「病気」と結びつけてみたくなるのは、どうも私だけの悪い癖でしょうか。とくに私の胸に強く徹えたことから申しあげましょう。

昨年の春でしたか、二、三日お宅にお世話になったことがあります。例のとおり二階の仏間兼書斎兼応接間に通されて先生と机を隔てて、畏まっている私、それからそろそろと先生のお静かなお話の中に包みこまれておりますと、先生のお老けになったことや、私自身の体の衰えなどはどったに忘れてしまい、半日一日はすぐに過ぎていくのでした。こんな時奥様は仙台時代と同様に私達の横にお座りになって、お話を聴いて折られたいご様子でしたが、もうなかなかご家庭の用事が繁くして思うように落ち着いてはおられなかったようです。それでもご用時の隙には何度も二階に上がってこられ、どうかすると何かのきっかけを見ては、私達の話の中にお這入りになることもありました。一番ゆっくりしたお気持ちの時間は、どこのご家庭でも同じように火事が一通り片づいて夜分相当おそくなってからでしょう。そして時には一時間も二時間もーフト気がつくとご主人の先生は、どうやらお目をつむってご瞑想に入っていられるらしいこともあったほど奥様の方が、日頃幾重にも幾重にも積みたたみこんでおかれた、日常生活からのご感銘の糸をたぐ

り出す、次から次へとお物語りになっているのでした。その内容はほとんどすべてが家庭生活からのもので、それも空想や推理を入れない、装飾も気取りもないご自身そのままでした。どの一つにも率直な質実な、そしてある一定の温かさと深さとを保った、お人柄を伺わせられるのでした。それはうけたまわる方から申せば否定の肯定もしようのない原事実そのままなんです。

ーしかし、こんな根気の好いお話をうけたまわりえたのも、この数年間の前半においてでした。それから後になると、もう段々夜更かしをするだけのお体ではなくなって来たように見受けられましたので、出来るだけ夜分は早くお休みになるようにとお勧めも致し、ご自身でもそう努めておられたご様子です。

さて一昨年の話に戻りますが、午後私は下の坊ちゃんの部屋で、周囲の壁にとりつけてある書棚の中から本を抜き読みしていました。隣座敷の箪笥の前で整理物をしておられた奥様が、フトこちらを振り向かれて、「松生さんも、もう一人前のお勤め人におら理になりましたね」とお声をおかけになりました。

なんの脈絡もない突然のお言葉であっただけに、かえって私はそのお言葉の意味に咄嗟に触れ得たように思いました。そのまま胸が塞がり、眼がくもって、なんともお返事が出来ませんでした。私にはその時の奥様の微笑が、思いなしかいつもと違って、ぐっと淋しく弱々しく感じられたのです。おそらくは淡い白雲のような影が奥様のお心の中を通りすぎていたのでしょう。あの仙台時代から随分と周囲に迷惑をかけ、得手勝手な我がままな道を踏んできた私が、今ー妻子をもち世間並みに公職の一端安乎としている今となっても、絶えず漠流のように動く心のたまたまの落ちつく所は、厚顔しいことですが依然として、このお家の中だったのです。真に穴あれば入りたいほど慚しい次第です。同時に私はこの時の奥様のお声を、あの仙台時代と比べずにはいられらいことがグッと私の胸に徹えました。この数年来、他人目にもお体のご無理なことが段々強く伺われていたのでしたが、こんなにも早くーとは予期致しませんでした。くたくたと頽れようとする心のまま平壌に帰り、妻にも語ると、共にこの淋しい不安な暗闇の中に埋もれこんでしまったのでした。

さっきも申しましたように先生と私との対話の切れ目を待ち兼ねたように、奥様ご自身が進んでお話の中にオ

加わりになり一時には横取りなさったかとも思われることもたびたびでしたが、それだけに当時のお心の中には、平常何のかが動きつづけていたことをお察し申すことができましょう。そういうお心の動きの更に奥には、自己を自己の前に顕現しようとするある強い必然が、四六時中、眼を覚ましていたに相違ありません。それはいはゆる「求道的な」というような言葉で軽く表わさるべきではありますまい。なぜなら奥様の日常生活そのものが、先生のお漏らしになったように、二十年にわたる忠実な「忍従」であったのですから。そして忍従こそは真実求道そのものではありませんか。―それだけに人には言われえない深い苦脳をお持ちつづけになっていたことと拝察されます。それはほとんど何人にも申し上げられないようなご苦悩ではなかったでしょうか。どうもあんまり立ち入った推測をする失礼をお許し下さい。奥様は年一年、生活のお疲れを支えきれぬお体に加えられて、なおこの一層差し迫ってくる心の問題と闘わねばならなかったのではないでしょうか。

そしてこんな事が女人として可能でしょうか。

一度こんなお話をしみじみとなさいました。

「先生のお側におりながら、私にはご信心のことが一向にとりつけないので・・・・」

いつもお念仏を自分の外に聞き流している私、それどころかお念仏の雨の中を逃げ回って、やっと雨宿りをさせて貰っている身分の私は、まったく途方にくれるほかはありませんでした。

私の心の中では、どこからとなく熱い悲しみが湧き出してきてとどめようもなく私を浸してしまい、その中に大声をあげて泣いている子供のような自分を見出すのでした。

奥様はちょっと私どもには想像もつかぬほどお子様達のことをご心配になっておられました。申すまでもなくお子様達はいずれも揃って秀でておられ、級長をなさるほどでしたから、上級学校への入学試験などには、そんなにお心遣いになる必要がなさそうに思われるのですが、それこそ「身を削るように」、奥様ご自身のお体が「倒れる」ほどご心痛になっていたようでした。これはあまりにも奥様のお心を内の方にのみ偏してお傾けになりすぎたゆえではないでしょうか。ほんの一例を申せば、一人の坊ちゃまは夜更かし勉強であり、他の坊ちゃまは早寝早起式であると致しますと、夜の冷えを案じながら夜更

けまで坊ちゃまの後姿を見守っておられると、今度は直ぐに、次の早朝のお支度におかかりにならねばなりません。こうして女中は無いがちの中を、夜昼と休みなくこの無理を通しつづけていられたようです。

勿論先生からのお手伝いも随分あったと伺われます。とくにお小さいお子様のお世話は、先生があの通りの柔和な態度で少しもいやなお顔をなさらず、勤めていられたこともあった模様です。時には他人目には、まだるっこい程だったと私の家内が半ば羨ましそうに伝えたこともございました。しかし奥様の身にしてみれば、この二階の先生が、下にお下りになることは、どれだけお心苦しいことだったでしょう。先生の専心のご勉強に少しでも邪魔になることは、奥様は文字道り身をもってお防ぎになっていられたようです。

これも家内がうけたまったお話ですが、先生は大学にご講義のある時間以外はほとんどお家でご研究になっていますので、奥様は一寸でも外出なさる機会がないのです。もし奥様の留守に商店の御用聞きでもまいりますと、その度に先生が二階からお下りにならねばなりますまい。それが申訳ないからという訳です。それだけに先生が二階におられる間は、下座敷ではコ t との音もさせむようにとお心を配っておられたのです。十年もお住まいになっている京城を、多分よくはご承知になっていますまい。これにはもう一つの外的な理由、すなわちお召物の質素なということも関係しておりましょう。すなわち着物の新調ということはほとんどなさらなかったようです。

昨年でしたか東京の方へ久しぶりにお帰りになった時、むこうでお迎えに出られた方々が昔のままのお召物の奥様を見て、「これでは教授夫人だと言って歩くわけにはいかぬ、あんまり身なりを構いなさすぎる」とあきれられたとお漏らしになったことでも想像されるように、社交的な外部との交渉は最小限にとどめられていたのでしょう。これとちょうど同じことが乃木大将夫人のお若い頃にもあったと聞いております。いわゆる外的な生活の華やかさからまったくそむいて、質実にわき目もふらずただ一つのご家庭の道に没入されてきたのです。それだけにこの東京でのことは奥様にも感慨深げなご様子でしたので、うけたまわっている者の方が思わずホロリとさせられたほどです。

よくこんなこともご述懐になりました。「京城は淋しい。大学の生活は人と人との間も疎と疎としくわびしいもの

です。一番なつかしく心頼もしく張り合いのあったのは仙台です。あの毎週生徒達の集まりのあった頃です。」仙台時代のことが、高校生活のとかく陥り易い粗雑な外面化から私達を救うて下さったものとして、私達にこそ忘れえぬ生涯の思い出となっているのは当然ですが、奥様にもそんなに思って戴いているのかと思うと有り難くてなりません。それにつけても内地のように伝統的な人情にうるおいや、磨かれた精神の余裕というものが枯れがちな外地での生活は、これを幾分でも埋め合わし乃至はごまかそうとする結果、万事が華美に流れざるを得ないのです。奥様の淋しいとおっしゃる気持ちは、その他の理由は別としてもお察しするに難くありません。

実際、打ち解けて話し合う知己の少ないこの地で、私は自分のわずかの親友の誰かが京城に行く度に、先生のお宅へ伺って貰うことにしておりました。その上、内地から旅行に来て私の所へも立ち寄ってくれる友人にも、ぜひ京城では先生のお話を伺うようにと勧めました。こんな不時の来客のために何度も奥様にはご苦労をおかけ申したことだと、今となっては後悔してもおよばない始末です。ある時、「松生さんからのお客は、どなたも松生さんみたいな人ばかりですね」とお笑いになりました。これはまったく痛いところを突かれたのでした。私の偏しすぎたあまりにも世間付き合いのできない性質が類を呼んで、似たりよったりの友人となってしまったのでしょう。とにかくそれを笑い事に済ませて戴いたので、少しばかり私も心軽くなっている次第です。

最後にお目にかかったのは本年の春休みでした。かねて先生からのお便りで奥様のご病気のことは伺っておりましたが、まず二階で先生にご挨拶申し上げている間もお待ちかねのご様子で「下に来てくれるように」とお嬢様が申し伝えて来られました。九時の夜行で着城したのでしたから、もう十時すぎていたことでしょう。高台は夜霧の中に浮いていて、お部屋の中まで冷え切っていました。ご病床にお伺いして何とも申し上げようもございません。お見受け申したところ思ったほどおやつれにはなっておられないようですが、いつもとは違っているお言葉の端々に、よほどのお心細さがにじみ出ているのに私は不覚の涙をとどめえませんでした。折りも折り、翌日はお嬢様が東京の女専へご入学のための晴れやかな門出の日です。昨年はご長男を仙台の高等学校へ、今年はまたずっと女学校時代からお母様を助けて家事のお手伝い

をして来られたお嬢様ともお離れにならねばならないのです。もともとお嬢様にお付添いになって、入学式に列せられるおつもりでしたが、それも叶わぬことになったのですから奥様のご心中も如何ばかりだったでしょう。

お子様の将来をどんなに案じもし、またご期待もしていられたことでしょう。お子様達はみな恵まれた素質のお方であるだけに、段々ご成人なさるにつれて個性的なものが強く鋭くでてきているようでした。その中にはさまったり、その上に立って見たり、それぞれの方向を理解し、同感し調和をとっていくなどとなかなか容易ならぬご苦心だったでしょう。先にも申し上げましたご家庭内のお話の中心の一つとして、随分この辺のご消息を伺い得たことです。

翌日の午後、汽車の時間の迫る間際まで、お嬢様は甲斐甲斐しく家事を整え、お母様のお世話をしておられました。私も京城駅にお見送りに参りまして元気よく万歳を三唱致しましたが、それはお嬢様にも私にも、後に心残りのある悲喜相交わった門出でした。

平壌へ帰ってから奥様のご入院を承りつつも、私自身長く患ってしまい、その間に末女を亡くしたりして、再び京城へお伺い申し上げ得ず、承りたいことごとが限りなくあるままに、せめては万が一つにものご恢復をと祈念致しておりました甲斐もなく・・・・。

何もかもほんとうに思い出となってしまいました。どうも結局私自身についての思い出のようなことになりまして、奥様のお徳を損ずるところ多いことは真に申し訳ございません。

先生のお手紙によりますと、ご入院中、近角先生はじめ諸聖のご勧化空しからず、奥様には一大事を決定して、大往生を遊ばされた御趣、さもあることと感涙のほかございません。

不可能のことが顕現されました。この上はただお念仏もうすばかりでございます。

昭和十四年十二月九日夕　謹記

（白井成允先生が出版された敦子夫人の追悼文集『法雨集』に寄せられた。）